

これまでの議論の内容整理と、今後の取り組みのあり方を考えるポイント

R03 第 1 回

◎ 問題意識共有

- ・ 障害者といっても子どもから大人まで年齢に幅がある。
- ・ 視覚障害だけでなく聴覚障害や身体障害などそれぞれの特性に考慮して議論を深める。
- ・ 法律の整備やサービスの進化に合わせて、障害者サービスの内容の見直しが必要
- ・ 読書が困難な子どもにも読むことの楽しさ、知ることの喜びを味わわせたい。
- ・ デイジー教科書のような、子どもの事情に応じて利用できる支援が必要
- ・ 視覚障害者等という「等」の部分を考えて議論を深める。
- ・ 多様な調べ学習にも対応できる、多様な資料的ニーズ（触覚教材など）に応える必要性
- ・ 視覚や触覚など多様な特性に応じて利用できる資料の必要性
- ・ 障害者をとりまく社会の側に取り除くべき障害がある。図書館の資料提供のあり方に障害があると考えて、議論を深める。
- ・ 視覚障害だけでなく、発達障害やディスレクシアなど活字を読むことに困難な人を含めて議論を深める。
- ・ 外国にルーツがあつて、日本語を読むことに困難な人も含めて議論を深める。
- ・ 障害者サービスを通じて、社会に障害の所在や解消の必要性を伝えられる可能性
- ・ 障害者サービスを当事者以外にも知ってもらい、社会の認知度を高めていく必要性
- ・ 障害者サービスを支える人材を確保し、育成していく必要性
- ・ 図書館を利用しない理由は様々だから、それぞれの必要性や解決の可能性を考えたい。
- ・ 図書館利用や読書をしないことの原因をヒアリングを通して把握したい。

◎ 課題把握

- ・ サービス対象をより詳しく理解する。市内の障害者を取り巻く状況や市の施策について
- ・ サービス対象のニーズをより詳しく理解する。
- ・ 障害者サービスの内容をより詳しく知る。
- ・ 障害者用資料（内容・種類）をより詳しく知る。
- ・ 障害者用資料の検索方法や図書館を利用する方法を知る。読み上げ機能やサピ工等も。
- ・ サービスを提供する図書館職員の現状認識を知る。

R03 第 2 回

◎ 障害福祉センターひまわりからの情報提供を受けて

- ・ 疾病などで後天的に障害をかかえる人にはどのようにアプローチしているのか。障害者手帳制度について周知されているのか。
- ・ 障害者手帳の取得に消極的な人もいる。図書館サービスを考えるにあたっては、障害者だけを対象ととらえず、誰もが使いやすいという観点をもつことで、サービスを必要とする人に届けられることもあるのではないかな。
- ・ 学校でも障害のある生徒へ特化したサポートをするのではなく、みんなが過ごしやすいように考え、取り組んで、成果が出ている。公共図書館でも同じように考えられるのではないかな。
(点訳他支援ボランティア講座の参加者減少ということを受けて)
- ・ 支援ボランティアの募集告知を図書館内でするだけでも効果があるのでは。

・中学1年生でボランティア体験学習に取り組むことが多いが、そういう機会を利用して若年層に支援ボランティアの活動への関心を持たせる可能性が考えられる。

◎当事者ニーズを把握することについて

- ・ニーズの調査は大切だが、把握したものをどうサービスに反映させていくのが難しい。
- ・障害者用資料の展示などに際して、簡単なアンケートを実施してはどうか。
- ・障害者のニーズを考えるとともに、障害者を含むすべての人へ働きかけることも必要ではないか。例えば図書館資料の多様性に触れて、住民の多様性への気づきにつながることもある。
- ・展示等、見て、触れて体験することは人に伝わりやすい。できることから取り組むのは大事。
- ・児童生徒にとって身近な学校図書館でも障害者用資料と接する機会をつくれないうか。そうして興味関心が高まることで公共図書館にもうまくつなげられないか。
- ・大学生でも障害者用資料に実際に触れて学ぶことが多い。
- ・障害者だけを対象にすると、自分とは関係のないことと受け止める人が多い。図書館がひろく情報提供していくことで、幅ひろくニーズが図書館にもたらされることも考えられる。

R03 第3回

◎当事者ニーズを把握することについて

- ・技術の進歩により多様な読書形態が広がっているように感じている。それらの実態を把握することも必要ではないか。当事者間の情報格差のような課題もそれにより見えてくるかもしれない。
 - ・資料のデジタル化に伴い読書機器や手段も多様化している。それらの使い方を情報提供していくこともニーズに応えることになるのではないか。情報提供への反応をサービスの改善につなげることもできる。
 - ・デジタル化に伴う読書支援に関しても、それを担う人材の確保、育成が欠かせない。対面朗読や音点訳図書製作についても、今後はボランティアに頼りすぎないように留意が必要ではないか。
 - ・すべての市民の読書ということを考えるときに、外国人が日本語を読むことの障壁を図書館利用の障害ととらえ、議論していく必要を感じる。
 - ・教育現場でも教科書のバリアフリー化など参考資料の中にも関心の高い事例がいくつかあった。児童、生徒の利用を想定すると、より細かく習熟度に応じた、ていねいな情報提供や支援が必要になってくる。
 - ・多様化に図書館だけで対応することは事実上困難ではないか。関係機関、団体との連携が鍵である。調査にあたっては、ネットワークを活かすという視点を踏まえておくべきである。
 - ・調査によってできたネットワークは、図書館サービス全体を発展させることにもつなげられるのではないか。
 - ・これまで提供された市の統計や過去の調査事例からうかがえることから、今回の調査事項を絞り込んで、調査実施案を具体化してはどうか。
 - ・調査は市立図書館の機能を踏まえたうえで、目的や内容を設定すべきである。資料や情報の提供、蓄積、それらに関係するスキルは図書館の担う部分である。
- ◎その他
- ・誰もが見られるフロアで障害者サービス等の情報発信をすることの必要性は、前回の議論で確認されており、(事例報告のあった展示企画について) 継続して取り組んでほしい。
 - ・展示の場所を変えて実施することで、さらに周知の広がりを期待できる。企画に対しての反応のほかり方も工夫が必要である。

・学校図書館は公共図書館とも連携しており、読書バリアフリー環境を充実させていく役割を期待できる。

R04 第 1 回

◎ 読書バリアフリーの取組み：利用者意見の聞き取りについて

- ・「アクセシブル」やその他用語について、聞き取り対象者が理解できるよう配慮が必要なこととともに、サービスやその資料を改めて説明し、知っていただく機会ととらえて取り組んではどうか。
- ・「困っていることはありますか」という聞き方より、「希望するサービスはありませんか」と聞かれる方が回答しやすいこともある。アンケート用紙の聞き取り結果をみても、「意見があればお聞かせください」という設問によく回答されているようだ。
- ・他人に推薦できるポイントや紹介できる利用方法について問いかけても良いのではないか。
- ・おもに成人を対象に聞き取りされているが、子どもの視点、子どもの図書館利用の実態を知りたい。
- ・直接の利用者に加えて、支援者からの声も聞き取る必要性を感じる。

R04 第 2 回

◎ ヒアリング結果報告について

- ・聞き取りを通して気づかされることが多かった。例えば道路の点字ブロックの不備など。
- ・障害のある人の読書支援にボランティアの皆さんの力が大きいことがわかった。ボランティア活動の支援だけでなく、引き続き職員の育成も課題になると思う。
- ・誰もが、図書館を安心して利用できるということを大切にしたい。
- ・細かなニーズに応じて必要な支援を柔軟に提供できる仕組みにしておくほうが良い。
- ・「点字は視覚障害者の文字という認識があり、利用のすそ野を広げたい」という声を寄せてくださっているが、図書館の取組みを通してこのような認識があるということは、図書館の役割が点字図書を貸出していること以上の重要性があるように感じた。

◎ 報告書（素案）について

- ・いわゆる楽しみのための読書だけのように読み取れるところがあるが、情報にアクセスすることを保障するという視点を抜かしてはいけない。
- ・現状を整理しておくことも必要だが、ヒアリングで寄せられた当事者の声から今後のあり方を導き出すほうが良いのではないか。
- ・これまでの審議は、図書館利用に障害のあることをどのように解決していくのかという視点を大切に議論してきたので、その点を盛り込むべき。
- ・利用者の利用状況を改善するばかりでなく、図書館を利用するにあたってバリア（障害）を感じている人を対象に、どこに障害があつて、それを取り除くにはどうすべきかという視点が素案には欠けている。
- ・バリア（障害）を認識して、それを改善する行動や取組みが、バリアフリーや合理的配慮の本質である。
- ・障害のある人に直接アプローチすることに加え、例えば障害者用資料の展示などを通して、社会全体の相互理解を深めるきっかけにもなる点も押さえておきたい。
- ・障害のある人も含めて、図書館の取組みが知られていないのは、PR や情報提供に取り組む必要があるということだと思う。

R04 第3回

(本日の審議内容)

◆ 今後の取り組みのあり方を考えるポイント (案)

- ◎ 図書館の取り組みは、図書館利用に際してのバリアを取り除くこと
- ◎ 市民（当事者）の意見を取り入れて、バリアを取り除いていくこと
- ◎ 図書館の取り組みを通して、社会の相互理解につながることを
- ◎ ニーズの変化や新しい動きに柔軟に対応できるようにすること
- ◎ 人材を育成し、サービスの継続性を保つこと
- ◎ 市民（ボランティア含む）や関係機関との連携により効果を高めること